

聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

第3章 ヨシュアからサウル王までの時代⑥



サムエル

サムエル

サムエルは、祈ることを学んだ時にはまだ子どもでした。「そのうちに主が来られ、そばに立って、これまでと同じように、『サムエル。サムエル』と呼ばれた。サムエルは、「お話してください。しもべは聞いております」と申し上げた」（I サムエル 3:10）。しかし、サムエルが神とのやり取りに入る以前に、既にエリが彼にどのように祈るべきかを教えていました。「今度呼ばれたら、『主よ。お話してください。しもべは聞いております』と申し上げなさい」（3:9）。



エリの指示は、深遠なまでに単純で、かつ、単純なまでに深遠なものでした。それは、人生における中心的な問題に正面から向き合うものでした。**すなわち、神の御声を聞くということと（主よ、お話してください） それに従うということです（しもべは聞いております）。**サムエルの敬虔で傑出した働きの契機となったものは、ここにあったのです。クリスチャンの両親も（自分たちの家庭の祭司として）、子どもたちを祝福したいと思うことでしょう。そして、子孫に対して、神の御言葉を通じて御声を聞くという単純な自覚を分かち合うことにより、また、神からの招きに即座に喜んで従うということを促すことにより、世界を祝福したいと思うことでしょう。

しかし、神のメッセージは、この若く素直なサムエルが、その出所を認識することができるようになるまで与えられませんでした。この点において、彼には助けが必要でした。語られていることの出所は、語られているメッセージと同じくらい大切です。サムエルとエリは二人とも、**お語りになっていたのがまさしく神であることを知る必要がありました。**エリは、報告されていることが子どもの想像力によるものではないことを知る必要がありました。かくして、母親の祈りが「神に聞かれた」ことで主に捧げられたこの子ども自身が、神からのお言葉を聞いて応答する準備が整ったのでした。まず、彼には神の御声が聞こえました。次に、神には、聞こえたことの出所を認識していることを確認させるようなサムエルからの応答が聞こえました。**神の御声を聞き分けることと、祈りのうちに神と交わることを学んだことによって、サムエルは信仰のリーダーシップを取るという使命にふさわしい者となった**のです。

後にサムエルは、イスラエルに勝利をもたらすとともに、信仰のリバイバルをもたらすためにも用いられました。「それで、サムエルは言った。『イスラエル人をみな、ミツパに集めなさい。私はあなたがたのために主に祈りましょう。』彼らはミツパに集まり、…その日は断食した。そうして、その所で言った。『私たちは主に対して

罪を犯しました。』…イスラエル人はサムエルに言った。『私たちの神、主に叫ぶのをやめないでください。私たちをペリシテ人の手から救ってくださるように。』サムエルはイスラエルのために主に叫んだ。それで主は彼に答えられた。」(Ⅰサムエル 7:5-6、8-9)

イスラエルは、主から離れてしまっていました。彼らの心の忠誠は外国の神々に向けられていました。ペリシテ人は圧倒的な勝利を収めつつありました。現在のあり方が正されるしか、彼らが神からの助けを得ることのできる道はありませんでした。サムエルのリーダーシップのもと、彼らは三つのステップを取ります。

①断食し(7:6)、 ②罪を告白し(7:6)、 ③神の介入を必要としていることを認めたのです(7:8)。祈りは、祈る者がまず、既に明らかにされている神のみこころを認識し、それに基づいて行動するならば、期待されている以上の結果を生み出すことがあるものです。

ここに記されているサムエルの祈りは注目に値します。サムエルは「叫んだ」とあり、「それで主は彼に答えられた」(7:9)と記されています。聞かれる祈りは、言葉を尽くしたものである必要も、複雑なものである必要もありません。心から求めているということと完全により頼んでいることとを反映したものであるだけで十分なのです。神は、お聞きになると行動を起こしてくださるのです(7:10-14)。



しかしながら、敬虔であることも、落ち込むことから免除されるということの保証にはなりません。また、敬虔な人々が進んで教えているような、神のお定めになった教えに対して、他の人が完全に忠実に従ってきくという保証があるわけでもありません。息子たちが「父の道に歩まず、利得を追い求め、わいろを取り、さばきを曲げていた」(Ⅰサムエル 8:3)ということが、サムエルにとって個人的に大きな失望となっていたことは疑う余地がありません。しかし、その失望に加えて、イスラエル長老たちからの自分たちを治めてくれる王が欲しいという要求があったこと(8:5)を見ると、サムエルが感じていたはずの痛みを私たちも少しは感じられるはずです。にもかかわらず、彼は主のための働きを継続します。「彼らが、『私たちをさばく王を与えてください』と言ったとき、そのことばはサムエルの気に入らなかった。そこでサムエルは主に祈った」(Ⅰサムエル 8:6)。自分自身の失望と不快感は脇に置き、サムエルは祈りました。「彼が人々と神との間の仲介者としてふるまったのは、まさに預言者としてのことであった。そして、投げかけられた問いが自らを傷つけるようなものであったにもかかわらず、彼はこの最高の機能を果たす立場において、以前のもっと喜ばしい場面においてと変わらず、忠実に奉仕に務めたのである」

サムエルの受け取った答えは、慰めに満ちたものであり、また、不安と心配をかき立てられるようなものでした。「それはあなたを退けたのではなく、彼らを治めているこのわたしを退けたのであるから」(Ⅰサムエル 8:7)。彼らは、目に見えない、全能のヤハウエの代わりに、目に見える地上の絶対権力者による支配を選んだのです。そして、自分たちの必要が全て素晴らしい形で満たされることが伴う神政、あらゆる素晴らしい約束が伴う神政を退け、自らの欲に任せて王政を求めていったのです。そこに付随してくるあらゆる悪も含めてです。全てのことを一人ひとりの最善を思ってなしてくださる神の導きを求めず、自分自身の欲に導かれて事を決めてしまうというのは、なんと哀れなことでしょうか。イスラエルは、神の不興を買い、苦い経験をもって大きな教訓を学ぶこととなるのです。

それからサムエルは主に呼び求めた。すると、主はその日、雷と雨とを下された。民はみな、主とサム

エルを非常に恐れた。民はみな、サムエルに言った。「あなたのしもべどものために、あなたの神、主に祈り、私たちが死なないようにしてください。私たちのあらゆる罪の上に、王を求めるという悪を加えたからです。」(I サムエル記 12:18-19)



サムエルほどの人物でなければ、イスラエルの人々をその企みのままにさせ、神の民を見捨ててその決断の結果が訪れるままにさせるという選択をしていたかもしれません。しかしサムエルは、過ちを犯している自分の民を励まし、慰めようとした。そして、その愚かさにかかわらず、彼らを助けようとした。また、彼らに対して、祈ること、引き続きリーダーシップを執ることを約束しています。「私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて主に罪を犯すことなど、とてもできない。私はあなたがたに、よい正しい道を教えよう」(I サムエル 12:23)。

サムエルは、自分の民のために祈ることをやめるのは主に対する罪だと理解していました。私たちはどうでしょうか。祈ろうが祈るまいが関係ないと思ってはいないでしょうか。無視するということが全能の神に対して罪を犯すことになるというのは、非常に大切なことです。イスラエルに対するサムエルの心配は、揺れ動く感情が記された行間にあふれています。そこには、主の群れを主の目を通して思いやる信仰の真のリーダーならば誰もが感じるような感覚が、ここかしこに描き出されているのです。

彼女のために涙は落ちる
彼女のために祈りは昇る
心配と労苦は彼女に向けて
労苦と心痛が終わるまで

高い位置に置かれている神のしもべたちの失敗に、深く悲しみに満ちた失望を覚えるということは、敬虔な人物には珍しい体験ではありません。『わたしはサウルを王に任じたことを悔いる。彼はわたしに背を向け、わたしのことばを守らなかったからだ。』それでサムエルは怒り、夜通し主に向かって叫んだ」(I サムエル 15:11)。

ある注解者はこの箇所について次のように語っています。

彼(サムエル)は、…彼(サウル)のために、この命令が彼に反するものとならないよう、夜通しとりなしをした。他の人々が寝床で寝ている間に、彼はひざまずいて祈り、神と格闘していた。彼は、…自分自身が政権から排除されたことを批判してはいなかった。あるいは、他の多くの人々ならばそうするような、自分の後継者となったサウルが早々に退けられてしまったことを密かに喜ぶ、ということをしていない。彼は逆に、王としてのサウルの地位が確立するように、そして、かの忌むべき日が決して来ることがないように、切に祈り求めている。罪人が拒絶されてしまうことは、良い人々には悲しみなのである。神は彼らの死をお喜びにならない。ならば私たちも、喜ぶべきではないのである。

サムエルと神との間には、途切れることのない交わりがありました。サムエルが語る、神が応答する、神が語る、サムエルが応答する、という交わりです。

主はサムエルに仰せられた。「いつまであなたはサウルのことと悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。角に油を満たして行け。あなたをベツレヘム人エッサイのところへ遣わ

す。わたしは彼の息子たちの中に、わたしのために、王を見つけたから。」サムエルは言った。「私はどうして行けましょう。サウルが聞いたら、私を殺すでしょう。」主は仰せられた。「あなたは群れのうちから一頭の雌の子牛を取り、『主にいけにえをささげに行く』と言え。(Iサムエル記 16:1-2)

導きを求める人々にとって、導きは既にそこにあります(ヨハネ 7:17 を参照)。献身した心と訓練された耳があれば、「これが道だ。これに歩め」(イザヤ 30:21)といった主の優しい言葉を聞くのは難しいことではないはずです。恐れは、不敬虔な者たちにとっての敵であるだけではなく、時として、敬虔な人々にとっての敵にもなります。しかし、敬虔な人々は、既にそこに解決の方法を持っています。彼らに必要なことはただ、「おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づく」(ヘブル 4:16)ことだけです。サムエルはそうしました。そして、即座に解決を見出したのです。

？ 質問

- 1 サムエルは、信仰のリーダーシップを取るという使命にふさわしい者となるために、子どものころにどんなことを学びましたか？その学びのためにエリはサムエルにどんな指示を与えましたか？
- 2 サムエルはイスラエルに信仰のリバイバルをもたらすために用いられました。彼のリーダーシップのもと、イスラエルはどのようなステップで祈りましたか？またサムエルの祈りのどんな点が注目に値しますか？あなたが模範とすべきことがありますか？
- 3 サムエルはイスラエルの要求に失望しました。それでも彼が継続したことはどんなことですか？それに神はどのように答えて下さいましたか？あなたは、神に従いながらも落ち込む状況に直面しても、なお祈り続けていますか？そのためにはどうしたらよいと思いますか？
- 4 サムエルは、イスラエルの民に失望しながらも、彼らのために祈ることをやめるのは神ご自身に対して罪を犯すことだと理解していました。このことから、あなたは、自分を失望させる人たちのためにどのような態度をとるべきだと思いますか？
- 5 サムエルと神との間には途切れることのない交わりがありました。あなたと神との間にも同じ交わりがありますか？



祈り

主なる神さま。私が変わることなくいつもあなたの声を聞き、あなたに従うことができますように。失望して祈ることをやめることがないように助けて下さい。